

総合理学研究所の役割

総合理学研究所所長 齊藤光實

総合理学研究所の役割を考える上で研究所規程をみると、第2条には「理学に関する研究と調査を行い、学問の向上と発展に寄与することを目的とする。」とある。現在の研究所が、このような目的を十分に達成できているかが問題である。大学あつての研究所であるのは当然のことであり、規程の目的を達成することによって大学の発展にも寄与することが大切であると思う。

昨今の大学には手を拱いては消滅するという危機意識が次第に高くなってきている。昨年度には法科大学院が認可され、神奈川大学にも設置された。資格を得て、安定した職業を選択しようとする学生を獲得するためである。ご承知の人もいるかもしれないが、今年度と来年度に新設される薬学部の数是全国で20ほどにものぼる。資格が得られる薬学部および医学部の人気は常に高く、多くの大学がその人気を利用しようとしているためである。

それでは、理学部はどうか。理学部は資格とは一切縁がない。*scientia*は知識の意であり、*scio* “to know” に由来する。従って理学部では知識を得ること、知ること、知る技術を学ぶところである。そこで理学部の売り物(最近の話し言葉では「売り」となる)は*scientia*を体得する学生を教育することである。基礎を重視することはこの点から極めて重要である。ペディグリーチャムという犬の餌でおなじみの*pedigree* (系図、家系、系統、血統)が、家系図に似て長いことから、フランス語の*pied de grue*「ツルの脚」に由来することを知っていることは、資格の修得を第一に考える人々には何の値打も持たないであろうが、社会はいつの時代でもそのような知識を持つ人を少数ではあっても必要としている。したがって、理学部としては基礎教育重視、内容重視、および無資格で徹底すべきであり、そこに理学部教育の最も著しい特色があり、また未来がある。

総合理学研究所の働きとして三つの領域を考えている。一つは研究であり、研究所は大学内の共同研究の窓口であり、研究所内の共同研究を行い、また共用機器に対する予算を持つ。もう一つは産業界などの外とのつながりの窓口としての機能であり、これについては、昨年度、研究所内に理学部産官学連携推進委員会を設置して態勢を整えた。三つ目の領域は教育である。これについては今のところ何もないが、理学教育を考える一つの拠点とすべく、検討したい。所員の皆様もご意見をお寄せください。